

ヘルダーリン „Brod und Wein“ における詩人の姿

－ハイデガーの抱く「詩人像」理解の端緒として

山本 希

0, はじめに

ハイデガーの後期の思想において、「明け (Lichtung)」が鍵語のひとつとして挙げられうる。この「明け」に意義的に接続しうるものとして、ハイデガーの中期の思想に現れる「開け (das Offene)」がある。ハイデガーの前期の代表作である『存在と時間』において、「公開性 (Öffentlichkeit)」という術語が用いられているが、これには非本来的な現存在の在り方という消極的な意味が与えられているのみである。それ故に、「公開性」と「開け」には、思想的に見て直接的な連続性はないと考えるのが妥当であろう。

では、ハイデガーはこの「開け」というような着想を何処から得たのだろうか。この問いに対して、ハイデガーはヘルダーリンの詩からその着想を得たという答えを導きたい。そのために、本稿においては、ヘルダーリンの詩において描かれている「開け」と、ハイデガーの文脈における「開け」を比較検討することで、両者の思想の共通項を取り出すことを目的としたい。そこで取り出される両者の共通項は、ハイデガーにとっては、ヘルダーリンの詩の解釈を端緒として展開され、科学技術批判へと接続される後期の思想の核心となるのではないと思われる。またヘルダーリンにとっては、本稿で両者の思想の共通項が明らかにされることにより、詩の論理によって語られた彼の思想が、哲学者であるハイデガーの言葉により新たに露わにされると思われる。

本稿は、ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』を論じる第一部と、ハイデガーの『真理の本質について』を論じる第二部とに分かたれる。ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』においても、ハイデガーの『真理の本質について』においても、もちろん「開け」という語は出てくる。だが、一見すると、それぞれの文脈があまりにも意味的にかけ離れているように思われるために、両者の「開け」のもとに同じ意味を汲み取りがたい。そこで、それぞれの文脈において「開け」という語を中心に、それと対立するもの (ヘルダーリンにとっては「夜 (die Nacht)」、ハイデガーにとっては「覆蔵 (Verbergung)」)、それに対峙する人間 (ヘルダーリンにとっては「詩人」、ハイデガーにとっては「現存在」)、さらに、そこで人間に与えられる「固有なもの (das Eigene)」を取り出し解釈することで、両者の思想の共通項を求めたい。

上に挙げた方法により、両者の思想の共通項を次の三点に認めうると考えられる。それらは両者の思想の難解さとは裏腹に、いたってシンプルな事柄だと思われる。すなわち、一点目は、人間が存在するという事態は、「私が存在している」という能動的な側面と、「私は「何かか」によって (それが

何者であるかは決して分からないけれど) 存在させられている」という受動的な側面との相克状態であるということである。また二点目は、人間がその生においてなすべき事柄と、それにふさわしい性質である、その人間に固有なものとは、決して能動的にのみ把握されうるものではなく、「何者か」によって受動的に与えられるものでもあるということである。例えば、欲望がそうであるように、「～を欲する」という私の欲望は確かに私のものではあるけれど、私自身でその欲望の発生を支配することはできない。これと同様に、私に固有なものは、私の決して知りえない「何者か」にその起源をもつと言える。そして三点目は、二点目で言及された固有なものの遂行は、何らかのかたちで、その「何者か」の示唆であるということである。より詳細に言うならば、人間は各人に固有なものの遂行により、一点目で挙げた、人間が存在するという事態は、能動受動といった二義的な側面の相克であるということが示唆されるのである。

1, ヘルダーリン『パンと葡萄酒』における「開け」

1-0, 『パンと葡萄酒』を解釈するための前置き

第一部においてヘルダーリンの『パンと葡萄酒』を解釈するに先んじて、この詩に関して次の三点に着目して、若干の説明を加えたい。すなわち、「開け」を考察するにあたってこの詩が選ばれた理由を、ハイデガーのヘルダーリン解釈におけるこの詩の位置を示しながら説明し、またこの詩の全体の構成を、そして第一部において何を指してこの詩の解釈が展開されるのかについて述べる。

まず、「開け」を考察するにあたってこの詩が選ばれた理由を二点挙げる。確かに、ハイデガー自身は、この詩を他のヘルダーリンの詩に比して、一層重きをおいて取り上げているようには思われない。というのは、ヘルダーリンの詩『帰郷/近しき者たちに寄せる』、『あたかも祝日のように』、『ギリシア』、『ゲルマーニエン』、『ライン』、『イスター』に関して、ハイデガーは詩全体を通して解釈しているが、『パンと葡萄酒』に関しては部分的に引用し、講義や講演において補足的に用いているに過ぎないからである。それにも関わらず本稿において『パンと葡萄酒』が取り上げられる理由の一つは、上に挙げたハイデガーによって全体を通して解釈されている諸々の詩においては、「開け」という語が詩われていないからである。そして二つ目の理由は、ハイデガー自身がまさにこの「開け」の詩われている箇所を引用している¹ことに起因する。つまり、この引用箇所においてハイデガーは「開け」について直接言及してはいないものの、ヘルダーリンの詩を解釈することを自身の後期の思想形成の軸としたハイデガーが、ヘルダーリンによって用いられたのとまさに同じ語を、無反省に自身の思想において用いるということは考え難い。むしろハイデガーは、この語を用いることにおいて、ヘルダーリンの思想へとつながりを持つとしたと考えることが自然であろう。それ故に、両者の思想の共通項を示すという本稿の目的のために、『パンと葡萄酒』の解釈が妥当であると言える。

¹ Bd.4 S.183

『パンと葡萄酒』は九つの節によって構成されている。そこには、ヘルダーリン自身だと思われる一人の男が、夜明けを待ちわびながら眠らずに夜を過ごす様、夜が明けた後にギリシアへと赴き自分にふさわしい固有なるものを獲得する様、そして獲得された固有なるものを遂行して詩作する様、その詩の内実が詩われている。

第一部は、「はじめに」で述べられた本稿の目的である、ハイデガーとヘルダーリンの思想の三つの共通項に対応する形で、三つの節に分かたれる。「1-1, 夜に対峙する詩人」において、昼をむかえるために夜に対峙する詩人の姿を取り出し、人間（詩人）が昼をむかえるために、夜にその根拠を持つことを示す。「1-2, 「開け」へと至る詩人」において、詩人に固有なものは、二義性をもつ夜によって与えられることを示す。「1-3, 詩人によって歌われる詩の内実」においては、詩人が固有なものを発揮し歌われる詩の内実を示す。その詩において、詩人は、昼と夜の和解をもたらす酒神について詩う。

1-1, 夜に対峙する詩人

本節においては、『パンと葡萄酒』の第一節、第二節から文脈に沿って「夜」と「詩人」の姿を取り出し（1-1-1）、そこにハイデガーの思想へとつながりうる意味を与えていきたい（1-1-2）。

1-1-1, 「夜」と「詩人」

街に夜が訪れ、人間たちは家々に憩う、そんな描写から詩は始まる。街は静まり、人々は眠りにつく。静かに家で安らう人間たちのもとに、夜は彼らを優しく包み込むものとして現れる。しかし夜に単純に安らぎを感じることができない者もいる。そういう者にとって、夜はまた別の顔を覗かせる。

今や一陣の風が吹きよせ、森の梢を揺り動かす、
見よ、我らの大地の影法師、月が
秘やかに今訪れる。熱狂的なもの、夜が訪れる、
星星に充ち、我々をほとんど意に介することはなく、
驚きを与えるものはそこに輝く。人間のもとに異質なものは
山脈の向こうから、哀しげにそして麗しく昇り来る。

夜は、「熱狂的なもの（die Schwärmerische）」、「驚きを与えるもの（die Erstaunende）」、「異質なもの（die Fremdlingin）」として、夜の安らぎに抱かれて眠ることができない者の前に現れる。夜は、静かに時を過ごす人間とは対照的に、熱狂的であり、それ故人間には驚きを与えるものとして、異質なものである。さらに、次のように夜について詩われる。

この高き尊きものの恩寵は驚異的であり、
どこから出て来たのか、ひとりの者に何を生起せしめるのか、知るものはいない。

夜は、人間にとって異質なるものであるために、夜の恩寵も彼にとって驚異的なものである。それ故に、夜によってもたらされる恩寵が、ひとりの人間に何を生起せしめるのかについて、知る者はいない。それ程までに幅のある恵みを、夜は人間にもたらす。人間は、夜に対して、恵みを求めて語りかける。

しかし夜は、我々にもまた与えなければならない、躊躇いがちな時に、
深まりゆく闇の中で、我々に留まるものが存在するように、
忘却を、聖なる陶酔を。

真夜中に目を覚ましたままにいる人間は、「躊躇う」ように遅々として進まない時を、「深まりゆく闇の中」に過ごす。この不安に満ちた状況のなかで、まず彼は、何か確固たるものを求めざるをえない。夜の壮大さに心奪われながらも、同時にそこから目を背けたいという欲求も生まれよう。夜が明け昼の訪れを待ち、昼に確かなものを築きたいのではないか。そのためには、夜には安らかに眠らなければならない。眠れぬ夜に触れてしまった、夜の思いもかけぬ程の恵み深さを忘却し、甘美な夢を誘う聖なる陶酔へと誘われなければならない。

しかし、夜の脅威に打ち勝ち、立ち向かう者はいる。

与えよ、ほとぼしる言葉を。その言葉は、愛し合うものたちに似て、
まどろみを知らないものであれ。そして溢れんばかりの杯を、一層大胆な生を、
聖なる記憶をも。目覚めたままに夜を過ごさんがために。

「目覚めたままに夜を過ごす」ためには、「忘却」や「聖なる陶酔」とは別のものが必要となる。「熱狂的」でありながら「未知なるもの」でもある夜に抱かれ、目を閉じることなく、人間はそこに立つ。その胸には、様々な想いが去来する。夜に向かって、人間は願いを口にする。夜を目の前にして、胸のうちに生じるものに、名前を、言葉を与えて欲しいと。そして夜が明けた後にも、目覚めたままに夜を過ごした証としての、夜の聖なる記憶をも。

夜を前にして、安らぎの中で眠ることができず、様々な名で呼びかけているのは、詩人ヘルダーリンである。詩人は、異質でありながらも驚異的な恩寵を施す夜から、目を背けたいとも、目を閉じて、他の人たちのように、夜に抱かれて安らかに眠りたいとも感じる。しかし詩人はそうせず、目覚めたままに夜を過ごすことを選ぶ。そのために、詩人は、夜から「ほとぼしる言葉」と「聖なる記憶」

が与えられる。これらを用いて、詩人は夜に生じたものを自身のなかに保ち、昼へと伝えるために、目を覚ましたままに夜を過ごす。

1-1-2, 恵み深き夜

『パンと葡萄酒』の冒頭である第一節、第二節で着目すべき点は、この詩が、夜を歌うことから始められている点である。詩人は、昼をむかえるために目覚めたままに夜を過ごさなければならない。ヘルダーリンの文脈における「開け」とは、光の照らされた開かれた場所、すなわち昼の状態を意味する。それ故に、ヘルダーリンの「開け」に対立する語は、「夜」である。光によって隈なく照らされた昼に存在するために、人間にとって「熱狂的なもの」、「驚きを与えるもの」、「異質なもの」である夜に、詩人は目覚めたままに過ごす。ここで、夜を明かした人間が夜明けをむかえることを、誕生のメタファーとして受け取りたい。すると、人間が存在者として存在するためには、夜にその根拠をもつとすることができる。

また、「熱狂的なもの」、「驚きを与えるもの」、「異質なもの」として歌われている夜の姿は、いずれも人間をはるかに凌駕した恵み深き性質を、我々に示している。この恵み深き夜から、詩人は「ほとばしる言葉」と「聖なる記憶」を受け取る。この夜の性質と、この夜と詩人との関わりが、1-2で説明される、詩人が開けにおいて固有なものを獲得することへと接続する。

1-2, 「開け」へと至る詩人

本節においては、『パンと葡萄酒』の第三節、第四節から文脈に沿って、夜に眠ることなく過ごした詩人が朝をむかえ、ギリシアで「開け」において固有のものを見出す様を取り出す(1-2-1)。ここから、ギリシアで詩人が目の当たりにする神々の不在という状況が、夜の、上で説明されたものとは異なるもう一方の性質のメタファーであることを示す。そして、詩人が自身に固有なものを見出すためには、二義的な夜を経験することが必要であることを明らかにする(1-2-2)。

1-2-1, 詩人と「開け」

場面は突如として切り替わる。夜に眠ることなく過ごした詩人は、朝を迎える。その日から詩人の胸の中に芽生えた「神々しき炎」が、詩人を旅へと駆り立てる。

神々しき炎も旅へと駆り立てる、昼に、夜に。
 さあ来たれ、開けを見に行こう。
 固有のものを求めよう、それがどんなに遠くにあろうとも。
 ひとつのものが揺らぐことなく、在る。真昼にも、
 真夜中になろうとも、常にひとつのものは存在し続けている、

皆に共通の尺度はあろうとも、ひとりひとりには、固有のものが与えられている、
誰もが行きうるところまで行き、そして帰ってくる。

詩人は、「神々しき炎」に旅に出るように駆り立てられ、ギリシアから訪れた神に従い、ギリシアへと向かう。

到来する神は、そこ（ギリシア）からやって来て、来し方を示す²。

その目的は「開け（das Offene）」を見ることであり、自分に固有のものを求めるためである。「開け」は、詩人に未だ開かれておらず、閉ざされたままにある。詩人に固有のものも、見出されてはいない。これらを叶えるために、詩人は自分の「行きうるところ」、ギリシアにまで行き、そして再び帰ってくることを想う。「開け」を目にし、固有のものを手にした詩人は、それをを用いて共同体における責任を果たすために、ギリシアで見た「開け」を、共同体のもとに詩作する。

そして、詩人は遂にギリシアの地に立つ。神々のために設えられたように、ギリシアの自然が、詩人の眼に飛び込んでくる。しかしそこに神々はいない。

だが玉座は、何処に。神殿は、何処に。ネクターで満たされた
杯は、何処にあるのか。神々を悦ばす歌は。
何処に、何処に輝くのか、将来を射抜く言葉は。
デルファイはまどろむ、何処に偉大なる命運は響いているのか。
あの翔る命運は何処に。何処に、幸福に満ち溢れて
轟き、晴れた空から眼へと降りそそぐのか。

もはやそこに神々はいない。「将来を射抜く託宣（die Fernhinterreffenden Sprüche）」も、「偉大なる命運（das große Geschick）」も、もはや響くことはない。デルフォイの街はまどろみ、それ故、かの託宣を受ける地も機能を果たさない。本来ならばそこで託宣を介し、人間に授けられる筈の「偉大なる命運」も響いてこない。

この地、ギリシアで詩人は、「将来を射抜く託宣」を介して、「偉大なる命運」として固有のものを手に入れる筈であった。神々の不在、「託宣」としての神々の言葉の不在、その託宣を介して詩人に贈られる「命運」の不在、これらの不在を嘆き、その所在を詩人は声高に尋ねる。その瞬間に詩人の視界は開かれる。

父なるエーテルよ！ そう叫ばれていた、口々に、

² 括弧内は筆者による補足。

幾千回も。生をひとりで耐えるものはいなかった。

そのような財貨は、異邦の者たちと分け持つことで悦びとなり、取り交わされて
歓声があがる。語の力は眠りながら高まるのだ。

父よ！晴れやかなるものよ！父祖たちから受け継いだ、太古の合図は
隅々に至るまで響きわたり、射抜き、創りあげる。

そのように天上のものたちは来る、そのように深く震えながら
影から人間のもとへ達するのだ、天上のものたちの日は。

かつて詩人は多くの仲間たちに囲まれ、共に神々に呼びかけていた。詩人は、神々へと呼びかける言葉を財貨として仲間たちと共有する。「父よ！晴れやかなるものよ！」という呼びかけの語のもつ力 (des Wortes Gewalt) は、人々の眠りを介して高まる。すなわち、人々の眠りによって日は毎日改まり、そのように時が熟す中で、詩人が仲間たちと神々を呼びかける語は力を高める。そして時を経て語の力が十分に高まった時に、その時にその呼びかけに応答するように、父祖たちから受け継いだ「太古の合図 (das uralt Zeichen) が能う限りに響きわたる。「合図」とは、父祖たちによって言い伝えられていた神々の到来の示唆であり、いわば前触れである。その合図は高みから響きわたり、人間を内部から震撼させる。そのように人間は合図によって射抜かれ、そして神々の震えが全身に伝わり、新たなものへと創造される。そうして、そのように人間のうちに震撼するものとして、天上のものたちは訪れる。人間は自分のうちに響く天上のものたちの震えを感じ、また自分の影を見ることで、影を生み出す日、天上のものたちであるところの日の到来を知る。

詩人は自分に固有なものを求めるためにギリシアへ向かった。ギリシアで詩人は、神々の不在、そして神々から贈られる筈の「偉大なる命運」としての、固有のもの不在を知る。しかしそれらの不在を実感した途端に、かつて仲間たちと共に神々の名を呼んだことを詩人は思い出す。そこでは、神々は現前しないものの、詩人は仲間たちと神々の到来を信じて待っている。そしてまた、仲間たちと共有する語を時の中で熟させることで、将来、語を用いた神々への呼びかけが、神々の現前への契機となることを、詩人は知る。

すなわち、詩人が現在において、神々の不在の自覚を、それ故に自分に固有のもの不在の自覚をすることで、詩人に、既在における仲間たちと神々を呼びかけていた様が現前し、また同時に、将来における神々の到来を知る。詩人は突如として、現在にありながら、既在と将来も見わたすことのできる、開かれたところに立つ。この場、開かれたところに詩人が立つこと、これこそが詩人にとって固有のものではないのか。だとするならば、逆説的ではあるが、詩人は固有のもの不在を認めたと故に、固有のものを手にすることができたと言える。

1-2-2. 詩人と固有のもの

恵み深き夜を眠らずに過ごした詩人は、固有なものを見出すためにギリシアへと赴く。ギリシアにおいて神々の不在を認めた詩人は、突如として、現在にありながら、既在と将来も見渡すことのできる、開かれた場所に立つ。1-3において示されるように、神々の不在の状態は、乏しき夜のメタファーとして受け取ることができる。1-1で言及された、「恵み深い」という夜の性質、そしてそれに真っ向から矛盾する「乏しさ」という夜の性質、この夜の二義性を経験することが、詩人が固有なものを見出すために必要とされる理由を以下に説明していきたい。

固有なものとは、ある人間が生において為すべきことと、そしてそれに相応しい性質とに分かつことができる。例えば、詩人の場合は、その生において為すべきことは詩作であり、そのために詩人性が必要とされる。どちらか一方が欠けたとしても、固有なものへの遂行はできない。そのため詩人は、固有なものを遂行するために、いずれをも知る必要がある。固有なものの二義性は、それぞれ夜の二義性に対応すると考えられる。すなわち、1-1で説明されたように、詩人は恵み深い夜を経験することで、夜から「ほとぼしる言葉」と「聖なる記憶」が与えられる。「ほとぼしる言葉」とは、まさに詩作のメタファーであり、詩人は恵み深き夜を経験することで、自分の為すべきことを知る。そして、詩人は神々の不在という状況、すなわち夜の乏しさを経験することで、現在にありながら、既在と将来も見渡すことのできる、開かれた場所に立つ。どんな人間も、その人間に相応しい「開け」をもつ。詩人は、夜の乏しさを経験することで、他の人間たちに比して一層広い「開け」に立つ。この一層広い「開け」こそが、詩人の詩人性であると言える。以上のことから、詩人が二義的な固有なものを獲得するために、夜の二義性がその根拠となることが明らかになる。

1-3. 詩人によって詩われる詩の内実

本節においては、『パンと葡萄酒』の第七節、第八節、第九節に沿って、神々が不在である乏しき時代、すなわち乏しき夜に耐える詩人の姿、そしてその後詩人が固有なものを遂行し歌われる詩の内実を示す(1-3-1)。そして、その詩において歌われている昼と夜との和解を、二重の意味で解釈する(1-3-2)。

1-3-1. 詩人によって詩われる詩

詩人は、現在にありながら、既在も将来も見わたすことができる、開けに立つ。しかし、詩人が、開けに立つという至福なる喜びで胸を満たすのも、現在における神々の不在という事実を痛感しているためである。神々の不在は、「乏しき時代 (dürftige Zeit)」として、詩人に現前する。詩人は喜びを知りながらも、同時に常に哀しい乏しき時代において、何を為すべきなのか。

しかし友よ！我々は来るのが遅すぎた。確かに神々は生きている、

だがそれは、頭上かなた別の世界でのこと。
果てを知らず、天上のものたちはそこに見守る、我々が生きているかどうか
ほとんど興味を示さないよう、それほどまでに、心から我々をいたわる。
弱き器は、常には彼らを享けることができずに、
ただ時折、神々しい充溢に耐えるに過ぎないのだから、そう人間は。

詩人は仲間語りかける。神々の不在について。そしてその理由について。我々の弱さをいたわる神々の心遣い故に、神々是我々から隔たりをもつ。神々が現前するため、すなわち、人間が神々をその器に享けるためには、高められた語による呼びかけが必要である。だが、語は未だ高められておらず、人間は神々を享けることができない。この神々が不在である乏しき時代は、上で述べられたような、恵みを与える夜の姿とは異なる夜の姿として描かれる。

そうなれば、神々の夢こそが生。だが惑いが
手を差しのべる、まどろみのごとくに。そして窮乏と夜とが強さをもたらし、
英雄たちは、鋼鉄の揺籃に揺られ、十分に育つ。
力溢れる心は、かつてのように、天上のものたちに似る。

「そうなれば (drauf)」は、前文の「ただ時折、神々しい充溢に耐えるに過ぎないのだから、そう人間は。」をうける。詩人は、神々の夢を見る。その夢の中でのみ、詩人は自分の生 (Leben) を実感しうる。逆に言えば、詩人は、夢から覚めた現実においては、自分の生を実感できない、つまり、自分の生の不在を実感するのである。

英雄たちは、雷鳴を響かせながらやって来る。だが、私には
眠りに身を委ねる方が好ましく思える。このように仲間もなく、独り
このように待ち続けるよりも。その間、何を為すべきか、何を語るべきか、
私には分からない。何故に、詩人たちは乏しき時代に。
だが、君は言う。詩人たちは、聖なる夜に国から国へと旅をした、
酒神の聖なる祭司のようだ、と。

詩人は、乏しき時代に、英雄たちの到来を仲間もなく待ち続けるよりは、「眠りに身を委ねる方が好ましい」と感じる。それにも拘わらず、詩人が眠らずに乏しき時代を過ごすのは、何故か。その問いは、「詩人たちは、酒神の聖なる祭司のようだ」という仲間の声によって答えられる。酒神の祭司として、詩人はどのように振る舞うのか。

パンは大地の結実でありながら、光に恩寵を享ける、
そして雷の神から、葡萄酒の悦びは訪れる。
そう、だからそこで、天上なるものたちを想うのだ、かつて
そこに在り、いつか相応しき時に戻り来る彼らのことを。
そう、だから真剣に詩うのだ、歌い手たちは葡萄酒の神について。

酒神とは葡萄酒の神であり、詩人は酒神の祭司として、葡萄酒の神について謳う。葡萄酒の悦びは、大地の結実としての葡萄と、天に君臨する雷の神によってもたらされる。だからこそ、詩人が大地において、葡萄酒の神について謳うことは、天上のものたちへと想いを馳せることとなる。葡萄酒の神について、さらに次のように謳われる。

そう！歌い手たちは高らかに歌い上げる。彼（葡萄酒の神）³が昼と夜とを和解させ、
天上の星々を未来永劫つかさどり、
何時も悦んでいる、と。その姿は、彼の愛する常緑の
唐檜の葉のようにも、木蔭で編まれた花輪のようにもある。
彼は留まり、彼自身が、去ってしまった神々の痕跡を、
闇の最中なる神々を失いし者たちに、もたらすのだから。

葡萄酒の神は、昼と夜とを和解させる。そして葡萄酒の神自身が大地に留まり、「去ってしまった神々の痕跡」を人間たちにもたらす。

1-3-2, 昼と夜との和解

詩人は、神々の不在という乏しき時代、すなわち乏しき夜に、ひたすら神々の再来を想い詩作する。その詩において、酒神が昼と夜とを和解させる様が歌われる。昼と夜との和解とは、昼と夜の関係の二義性に従って、二重の意味に解釈しうる。すなわち、1-1においては、眠らずに夜を明かした詩人が昼をむかえることが、誕生のメタファーとして受け取られた。ここで夜は、昼に存在することの根拠として説明されている。この意味において、昼と夜との和解が詩のうちに歌われることによって、昼に存在することがその根拠を夜にもつということが我々に示される。

そしてまた1-3において、現在における神々の不在の時代が夜という語で示されているのに対応して、昼とは、神々がかつて現前していた様を意味すると解釈できる。そのため、この意味において

³ 括弧内は筆者による補足。

は、昼と夜との和解を詩作することは、将来における神々の再来の予言と言えよう。神々の再来を予言するためには、かつて現前していた神々の記憶が必要とされる。この記憶により神々に関する言葉が生まれる。神々の記憶と神々に関する言葉は、夜の恵み深さの根拠である、詩人に与えられる「ほとばしる言葉」と「聖なる記憶」と解釈できる。ならば、かつての神々の現前として解釈された昼こそ、夜の恵み深さのメタファーとして受け取りうるのではないか。ここから、昼と夜との和解とは、夜の恵み深さと、夜の乏しさという二義的な夜の姿の示唆となる。

以上のことから、詩人が固有なものを発揮し歌う詩においては、人間が存在することの根拠に「何者か」としての夜が存するという事、そして夜は、恵み深いものでありながらも乏しいものでもあるという二義性をもつということが明らかになる。

2, ハイデガー『真理の本質について』における「開け」

2-0, 『真理の本質について』を解釈するための前置き

『真理の本質について』は、九つの節によって構成されている。本稿第二部において、『真理の本質について』の第二節（合致の内的可能性）、第三節（正しさを可能にする事の根拠）を2-1において、第四節（自由の本質）を2-2において、第五節（真理の本質）を2-3において取り上げる。まず、「2-1, 真理の現成としての「開け」」において、ハイデガーにとってどういう文脈で「開け」が問題とされるのかが説明される。続いて、「2-2, 現存在の本質根拠としての覆蔵」においては、真理と現存在の「開け」としての自由との連関が一層深く考察されることで、現存在の覆蔵された本質根拠が明らかにされる。最後に、「2-3, 「開け」と「覆蔵」」において、「開け」と「覆蔵」の在り方が相属性として説明される。

「はじめに」で述べられた本稿の目的である、ハイデガーとヘルダーリンの思想の三つの共通項に、第二部における三つの節は厳密に対応はしないが、その共通項は以下のような形で示される。すなわち、2-1においてはハイデガーにおける固有のものの内実が明らかにされ、2-2においては、固有なものの内実を現存在が知るためには、覆蔵性が必要とされること、そして現存在自身もその根拠を覆蔵性のうちに持つことを示す。2-3において、人間が固有なものを発揮した際には、「開け」における露現と覆蔵性の相属性が示唆されることを示す。

2-1, 真理の現成としての「開け」

本節においては、『真理の本質について』の第二節（合致の内的可能性）、第三節（正しさを可能にする事の根拠）に沿って、ハイデガーの「開け」が真理の根拠としての現存在の自由であることを取り出される（2-1-1）。ここから、現存在に固有なものを、存在者を在らしめることとして解釈したい（2-1-2）。

2-1-1, 「開け」と現存在の自由

伝統的な真理概念において、真理とは「ある言明が、ある事柄と合致すること」⁴と見なされている。しかし、言明という単なる言葉の羅列と、事柄が合致するとは、一体如何なることなのか。あるいは一層単純に、名と物が合致するとは如何なることなのだろうか。ハイデガーはこの問いに答えを導くため、「言明」と「事柄」が合致する、すなわち両者が何らかのかたちで関わりをもつことのできる場を想定する。「(言明と事柄が、あるいは名と物が) 関わり合うことは、開けのうちに (im Offenen) 立ちつつ、開かれるもの (ein Offenbares) のもとで、開かれるものとして、その都度自身を保つ」⁵。「開かれたところ」と「開示されたもの」とは、まず、「開かれたところ」があって、その後に「開示されたもの」が顕わになるというわけではない。「開かれたところ」と「開示されたもの」は相互依存的に、同時発生的に在る。「開示されたもの」は、語義通り「開かれたところ」に顕わになるが、「開かれたところ」もまた、顕わになる「開示されたもの」の背景に退くものとしてはじめて在りうる。言明と事柄の関わり合いは、「開示されたもの」として、現前するものであり、一存在者として理解されうる。

しかし、「何処から、表象しつつ言明することは、自身を対象へと正しく向け (richten)、その正しさに従って合致する、その指示をもつのだろうか」⁶。その根拠を、ハイデガーは次のように説明する。すなわち、「(正しさへと) あらかじめ与えること (Vorgeben) が、すでに自身を、開かれたところへ、この開かれたところに基づいて支配する開示されたもののために、解き放つ」⁷ためとする。開かれたところに顕わになる開示されたものである存在者は、ただ独りスポットライトを当てられたように、存在するのではない。常に既に人間的現存在との関わりの中で存在する。存在者が存在するためには、あらかじめ現存在が存在しなければならない。そしてまたこの「あらかじめ」という構造がまさに、言明と事柄の関わり合いの合致の根拠にもなりうる。つまり、言明と事柄の関わり合いといったものが、開示されたものとして在りうるためには、常に既に現存在との関わりの中に在らざるをえない。開かれたところに顕わになる開示されたものは、常に既に現存在という「(正しさへと) あらかじめ与えること」との関わりの中に存在している。すなわち、ここでの「正しさ」とは、誤りの対義語ではなくして、存在することそのものの状態であり、現存在との関わりの中に存在している開示されたものとしての存在者は、常に既に「正しい」と言える。そして、現存在という「(正しさへと) あらかじめ与えること」が解き放たれるためには、「開かれたところにおいて開示されるものに対して、自由であること (Freisein) としてのみ可能である」⁸と言われる。ここでの「自由」とは、通常理解されているような、「～から解放されてある」状態が意味されているのではない。ドイツ語の

⁴ Bd.9 S.182

⁵ Bd.9 S.184 括弧内は筆者による補足。強調は原文による。

⁶ Bd.9 S.185

⁷ Bd.9 S.185 括弧内は筆者による補足。

⁸ Bd.9 S.186 強調は原文による。

語義に即して、自由に空け開かれてあることと理解されるのがふさわしい。現存在の「現 (Da)」とは、ある空け開かれた場を意味する。つまり、自由に開かれた場である現存在が、言明と対象の合致の根拠となる。ここから真理の本質は、自由に基づくと言える。

2-1-2, 現存在と「固有なもの」

自由に空け開かれた場である現存在が、真理の本質の根拠となる。現存在が存在することで、ある場を空け開き、そこで他の存在者と関わりをもつことができる。存在者は現存在の「開け」においてはじめて存在することができる。言い換えると、現存在が存在することで開かれて、その開きにおいてそれと関わりをもつという仕方、他の存在者を存在させることができる。例えば、私が存在することにおいて、私が中心となったある場が開かれ、今ここに様々な文房具、家具、生活用品が集い、私と関わることに存在していると言える。私という人間が存在していなければ、これらのものも存在していない。このような意味で、現存在が存在することで、その開けを根拠として他の存在者を存在させるということ、これを現存在に固有なものとして解釈したい。

しかし、現存在に固有なものである、存在者を存在せしめることは、差し当たり意識されることなく現存在の「開け」において常に既に遂行されてしまっていると言える。我々現存在が、この固有なものを意識するという意味で獲得するためには、「開け」と対立するものとしての「覆蔵」を必要とする。「覆蔵」に関して、2-2において言及される。

2-2, 現存在の本質根拠としての「覆蔵」

本節において、『真理の本質について』の第四節（自由の本質）に沿って、真理と現存在の「開け」としての自由との連関を一層深く考察することで、現存在の覆蔵された本質根拠が明らかにされる(2-2-1)。ここから、固有なものの内実を現存在が知るためには、覆蔵性が必要とされること、そして現存在自身もその根拠を覆蔵性のうちに持つことを示す(2-2-2)。

2-2-1, 現存在と「覆蔵」

「真理と自由の本質連関へと思惟することは、我々を人間の本質への問いを、ある観点において追求することへともたらす。その観点は、我々に、人間の覆蔵されている本質根拠を（現存在を）経験することを保証し、しかも、その観点は我々をあらかじめ、根源的に現成する真理の領域 (in den ursprünglich wesenden Bereich der Wahrheit) へと据えるのである」⁹。現存在の自由と、それに基づけられた真理との関連を、より深く問うことで、我々は、現存在の本質根拠を経験することができる。自由と真理との関連をより深く問うのは、「自由が正しさの内的可能性の根拠であるのは、ただ自

⁹ Bd.9 S.187 括弧は原文による。

由がそれに固有の本質を、唯一の本質的な真理の一層根源的な本質から受け取っているからである」¹⁰ ということに基づく。現存在が真理の根拠となるための自由を備える「人間の覆蔵されている本質根拠」、「根源的に現成する真理の領域」とは如何なるものなのであろうか。

自由とは、開かれたところにおいて開示されるものに対して、開かれた自由として規定された。現存在は、自由を備える存在者として、存在者が顕わになることへ自己を関わらせている。「存在者が露現されていること (Entborgenheit) へ自己を入れ込むこと (das Sicheinlassen) は、その露現されていることのうちに自己を失うのではなく、存在者に面して (vor dem Seienden) 後退することへと、自己を展開するのである」¹¹。存在者が、開かれたところで開示されたものとして露現されている際に、現存在はその露現されていることに関わる。「存在者に面して後退することへと、自己を展開する」とは、一層根源的な「覆蔵されている人間の本質根拠」へと、現存在自身が展開されることを意味する。「このような在らしめること (Sein-lassen) として、自己を関わらせることは、それ自身を、そのようなものとしての存在者に (dem Seienden als einem solchen) さらし立て (aussetzen)、すべての振る舞い (alles Verhalten) を開かれたところへと移しておく」¹²。現存在は、その自由を根拠として、存在者を在らしめる。現存在が存在者を在らしめるとき、現存在は一存在者でありながらも、在らしめる遂行者として、他の存在者とは別様に在る。それが、現存在が「自身を、存在者にさらし立て」るということである。「在らしめること、すなわち自由は、それ自身において、外へとさらし立てつつ (aus-setzend)、脱-存しつつ (ek-sistent) ある」¹³。現存在は在らしめるものとして、存在者のもとで存在者に関わりながらも、存在者に対して、在らしめる遂行者としての差異を示すように、自身をさらし立てる。それは、さながら現存在が、存在者としての在り方から脱け出そうと在るがごとくである。現存在が、そこへと向けて脱け出そうとすることで示されるその先こそが、覆蔵されたままにあるものである。この覆蔵が、その姿を顕わにされたときに、ハイデガーによって「非覆蔵性 (アレーティア)」と称されるところの「真理」となる。「真理の本質へと眼差しを向けることで看取された自由の本質は、存在者の露現性のうちへと (自身を) さらし立てること (Aussetzung) として、示される」¹⁴。このように我々は、真理と自由の関係をより深く問うことで、「人間の覆蔵されている本質根拠」、「根源的に現成する真理の領域」へと思惟の眼差しを向けることとなる。「露現性それ自身は、脱-存しつつ自己を-入り込ませること (ek-sistenten Sich-einlassen) のうちで保たれている (wird verwahrt)。この脱-存しつつ自己を-入り込ませることによって、開かれたところの開性 (die Offenheit des Offenen)、すなわち「現」は、それがあるところのものとなる」¹⁵。

¹⁰ Bd.9 S.187

¹¹ Bd.9 S.188-189

¹² Bd.9 S.189

¹³ Bd.9 S.189

¹⁴ Bd.9 S.189 括弧内は筆者による補足。

¹⁵ Bd.9 S.189

2-2-2, 「固有のもの」と「覆蔽」

1-2において、現存在に固有なものが、存在者を存在せしめることと解釈された。だが、差し当たり意識されることなく、常に既に固有なものは遂行されている。現存在が、固有のものを自覚するという意味での、固有のものの獲得のためには、現存在と固有のものを分かち、その連関を改めて考察しなければならない。というのは、現存在が固有なものを差し当たり意識していないということは、現存在と固有なものが未だ不可分な状態にあると考えられるからである。固有なものとは、存在者を在らしめることであり、真理と言え。それ故に、真理と、現存在の「開け」としての自由との連関を一層深く考察することで、現存在が固有のものを自覚するという意味において、固有のものを獲得できると言える。

真理と現存在の「開け」としての自由との連関を一層深く考察することで、「覆蔽」が、固有のものとしての真理と、現存在の根拠であることが明らかになる。つまり、現存在は、開けに対立する「覆蔽」にその根拠をもち、存在者を自身の開けにおいて存在させるということが、自分に固有のものとして、自覚されるのである。

以上により、現存在の固有なものには、「覆蔽」がその根拠であるということ、そして、現存在が存在することも「覆蔽」がその根拠であるということが明らかになる。

2-3, 「開け」と「覆蔽」

本節においては、『真理の本質について』の第五節（真理の本質）に沿って、「開け」と「覆蔽」の在り方が相属性として説明される（2-3-1）。ここから、人間が固有なものを発揮した際には、「開け」と覆蔽性の相属性が示唆されることを示す（2-3-2）。

2-3-1, 「開け」と「覆蔽」の相属性

第五節のタイトルである「真理の本質 (Das Wesen der Wahrheit)」とは、ハイデガーもこの論文の九節注記で記しているように、本質 (Wesen) を動詞的に解釈するならば、「真理の現成」となる。上で説明されたように、この「真理の現成」には、「開け」としての自由がその前提となる。通常の我々の「真理」概念は、「啓蒙」の語が示すように、隈無く光で照らしもはや一点の翳りもない状態として理解されている。だがハイデガーは、開かれると同時に隠れるものの全体を我々に真理として示す。「在らしめることは、それ自身において同時に匿うことである。現-存在の脱-存的な自由においては、全体における存在者の覆蔽 (die Verbergung des Seienden im Ganzen) が生起し、すなわち覆蔽性 (Verborgenheit) がある」¹⁶。現存在は、その自由を根拠として存在者を在らしめる。存在者を在らしめるとは、だが、自由という開けにおいて光が照らされるのみならず、また同時にそこに我々

¹⁶ Bd.9 S.196

には決して認識したり到達したりすることのできない翳りを生じせしめることを意味する。

「覆蔵性は真性（アレーティア）に露現すること（Entbergen）を拒否し、真性をなお剥奪として許容するのではなく、真性に最も固有なものを所有として見守っている。そうして覆蔵性は、露現性としての真理から考えられるならば、非-露現性（Un-entborgenheit）であり、それ故に真理の本質に最も固有で最も本来的な非-真理（Un-wahrheit）である」¹⁷。覆蔵されているものは、どこまでも露現されることを拒み続ける。覆蔵されているものは、自身が奪われ、露現というかたちで明るみのもとに曝され、もはや覆蔵されていないものになることを許さない。そうではなく、覆蔵は、その露現されていないということのうちで、存在者の現成に不可避免的に関わっている。つまり、覆蔵性としての非-真理は、露現性としての真理と共属して存在者を在らしめると言える。

しかし存在者の現成に際して、覆蔵されているものは、その現成に関わっているにしろ、覆蔵されたものは露現されていないので、我々には知られることなく覆われている。「露現しつつ同時に覆蔵しつつ、全体における存在者を在らしめることのうち、覆蔵することが、第一に覆蔵として現れるということが、生起する」¹⁸とは、その意である。この覆蔵が覆蔵された状態で在ることを、ハイデガーは「密令（Geheimnis）」の内実とする。

2-3-2, 「固有なもの」と「密令」

「開け」と「覆蔵」の在り方が相属性として説明された。現存在は、2-2で説明されたように、真理と自由の関連を問うことにより、固有なものを意識的に獲得する。固有なものが意識的に獲得される前ならば、現存在は通常「覆蔵」を決して意識することはない。その際現存在は、「覆蔵」が覆蔵されていることにも気がつかない。ハイデガーの術語を用いるならば、彼は「密令」に気がつかない。それに対して、固有なものが意識的に獲得されることにより、存在者を開けにおいて在らしめる際に、その根拠として「覆蔵」が覆蔵された状態において存することを知る。すなわち、その際現存在は、そこに「密令」が続べていることを知るのである。この意味において、人間が固有なものを発揮した際には、「開け」と覆蔵性の相属性が示唆されることが明らかになる。

3, 結語

「開け」という語を中心に、その周縁にある語を、ヘルダーリン『パンと葡萄酒』とハイデガー『真理の本質について』において取り出し、解釈することでそれぞれ次のことが明らかになった。

第一部において、次の三点が明らかにされた。すなわち、昼をむかえるために夜に対峙する詩人の姿から、人間（詩人）が昼をむかえるために、夜にその根拠を持つこと。詩人に固有なものは、二義

¹⁷ Bd.9 S.193

¹⁸ Bd.4 S.194

性をもつ夜によって与えられること。詩人が固有なものを発揮し詩作される詩において、昼と夜の和解をもたらす酒神について歌われること。

第二部においては、次の三点が明らかにされた。現存在が存在することにおいて、覆蔵にその根拠を持つこと。現存在に固有なものの内実を現存在が知るためには、覆蔵性が必要とされること。人間が固有なものを発揮した際には、「開け」と覆蔵性の相属性が示唆されること。

第一部、第二部において導き出された諸点は、以下の三つの共通項へと集約される。一点目は、人間が存在するという事態は、通常理解されているような「私が存在している」という能動的な側面にのみ還元されるものではなく、「私は「何者か」によって（「夜」や、「覆蔵」と説明されるものの、その内実は人間には窺い知れないものである）存在させられている」という受動的な側面との相克状態であるということ。また二点目は、人間がその生においてなすべき事柄と、それにふさわしい性質である、その人間に固有なものは、決して能動的にのみ把捉されうるものではなく、「何者か」によって受動的に与えられるものでもあるということ。そもそも詩人は詩人であることを自分で欲したのか。現存在に至っては、固有なものは結局、現存在が存在することに還元されうる。現存在は、自分が存在することを欲することはできない。そして三点目は、二点目で言及された固有なものの遂行は、何らかのかたちで、人間の根拠である「何者か」の示唆であるということ。